



特集

百年後ノ市民ニモ知ッテホシイ佐世保ノ歴史

歴史寫眞散步



昨年は佐世保鎮守府が開庁して130年の記念すべき年であり、数多くの記念事業が開催されました。この鎮守府開庁以降、本市は急速に発展を遂げることになりましたが、当時の様子が分かる記録は、写真がまだ一般的な時代ではない上に、機密事項といふことで海軍の規制にありたり、焼失したりして、あまり残されていません。今回の特集では、その残された写真の中から、本市の歴史を伝える貴重な写真を抜粋し、歴史の大きな転換期となつた時代を振り返ります。

歴史が始まった瞬間

#1 佐世保鎮守府開庁式

明治23(1890)年4月26日、明治天皇を迎えて挙行された佐世保鎮守府開庁式の様子を写した写真。沖合に停泊する各艦からは礼砲の白煙がたなびいており、まさに佐世保鎮守府56年の歴史が始まった瞬間を捉えています。鎮守府開庁を機に急速に発展した佐世保の歴史を象徴する貴重な写真です。鎮守府庁舎のすぐ近くに海岸線があり、現在の米海軍佐世保基地などの敷地が後に埋め立てられたことが分かります。撮影は日本写真術の祖と称される上野彦馬によるものと伝えられています。



今も昔と同じ面影を残す

#2 佐世保鎮守府庁表門

鎮守府の顔とも言える表門の写真。門の奥に見えるのが鎮守府庁舎。何度も化粧直しが行われ、門柱上部にガス灯と思われる照明器具が取り付けられた時期もありました。現在も海上自衛隊佐世保地方總監部の正門となっており、昔と同じ面影を残しています。
完成：明治22(1889)年

第三海軍区鎮守府に 求められた条件

鎮守府とは、日本海軍の根拠地として艦隊の後方を統轄した機関(役所)のこと。フランス海軍を模範とするもので、所轄海域(海軍区)の防備や所属艦艇の統率・補給・整備、兵員の徴募・訓練、施政の運営・監督などに当たりました。
明治9(1876)年8月、日本で最初の鎮守府である「東海鎮守府」西海鎮守府の設置が正式に決定されました。
東海鎮守府は横浜に仮開設されましたが、西海鎮守府は長崎を候補地としながらも設置には至りませんでした。この状態はしばらく続き、明治14年には「4鎮守府構想」が示されました。この段階では伊万里湾への第三海軍区鎮守府設置が検討

されており、西日本各地の港湾で適地調査が行われました。
海軍が第三海軍区鎮守府に求めた条件とは、主に次の3項目でした。

- ① 大型艦船が停泊できるだけの水深があること
- ② 外洋の波浪や風の影響を受けにくいこと
- ③ 中国大陸や朝鮮半島沿岸、南西諸島までを警備する上で便利なこと

これらの条件の中で、特に中国大陸や沖縄方面との関係が重視され、明治19年5月、佐世保湾へ第三海軍区鎮守府を設置することが決定しました。
その後、日清戦争、日露戦争を通じて本土最前線の基地としての役割が確立されたことにより、拡張工事が次々に計画、実施され、街や港の姿は急速に変貌を遂げていきました。



海上自衛隊佐世保地方總監部の正門



(竹野堂月光)

Whole View of Sascho Town.

(二其) 景全街市保世佐

(竹野堂月光)

Whole View of Sascho Town.

(一其) 景全街市保世佐

#3 佐世保市街地

現在の佐世保玉屋付近から撮影された市街地の写真（明治39年～大正12年の間に撮影）。鎮守府設置を契機に多くの人押し寄せた佐世保では、これまで水田や湿地だった場所に近代的な都市を建設することが計画されました。非常に厳しい建築規制によって無秩序に家を建てるのが規制されたほか、碁盤の目のような街区などが設けられ、写真のように建物が整然と並ぶ都市景観が形成されました。建物のほとんどは2階建ての和風建築で、高さや軒出に統一感があります。また、土蔵造りの壁や瓦屋根などが採用され、火災に強い街となりました。

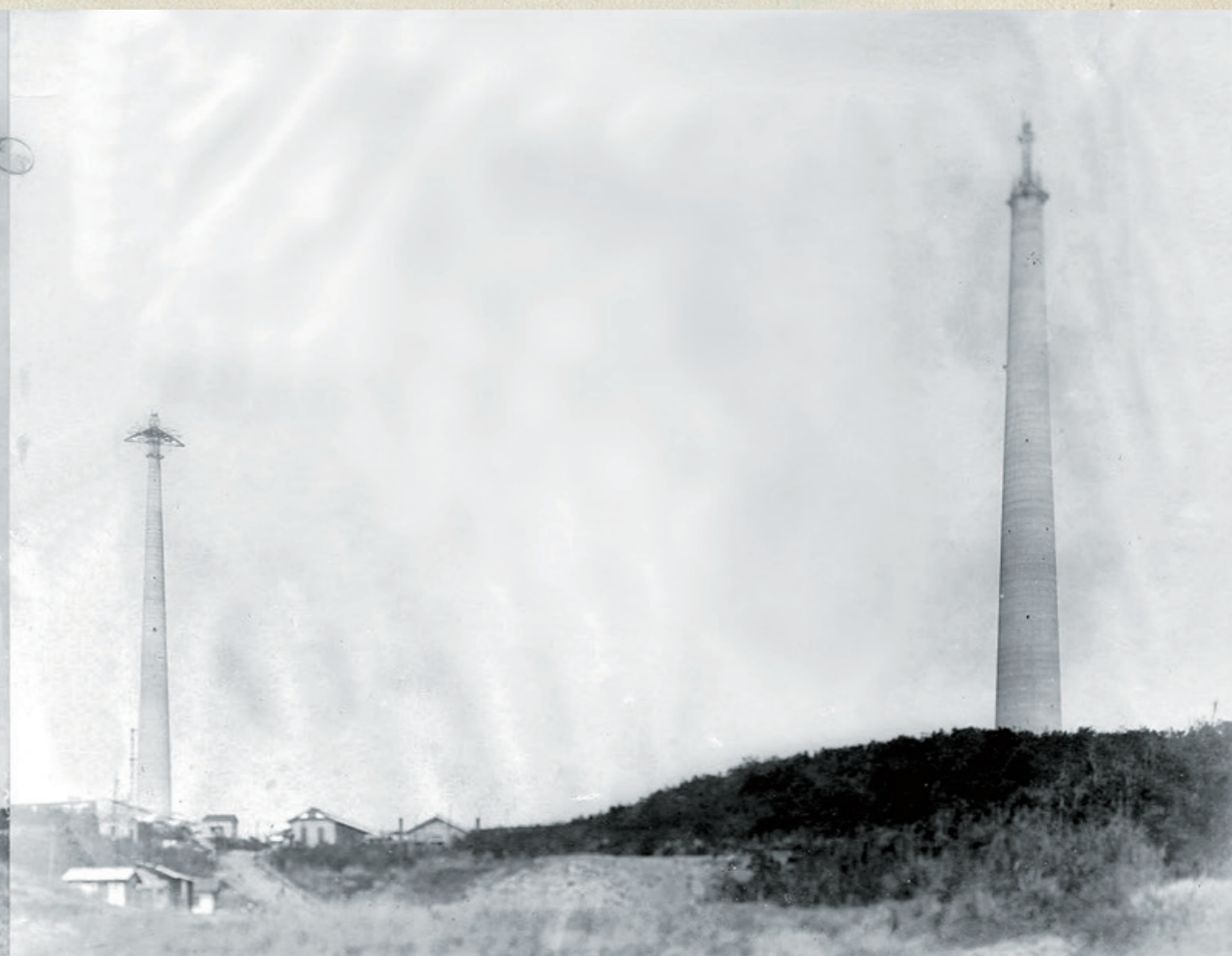
#4 佐世保無線電信所（針尾送信所）

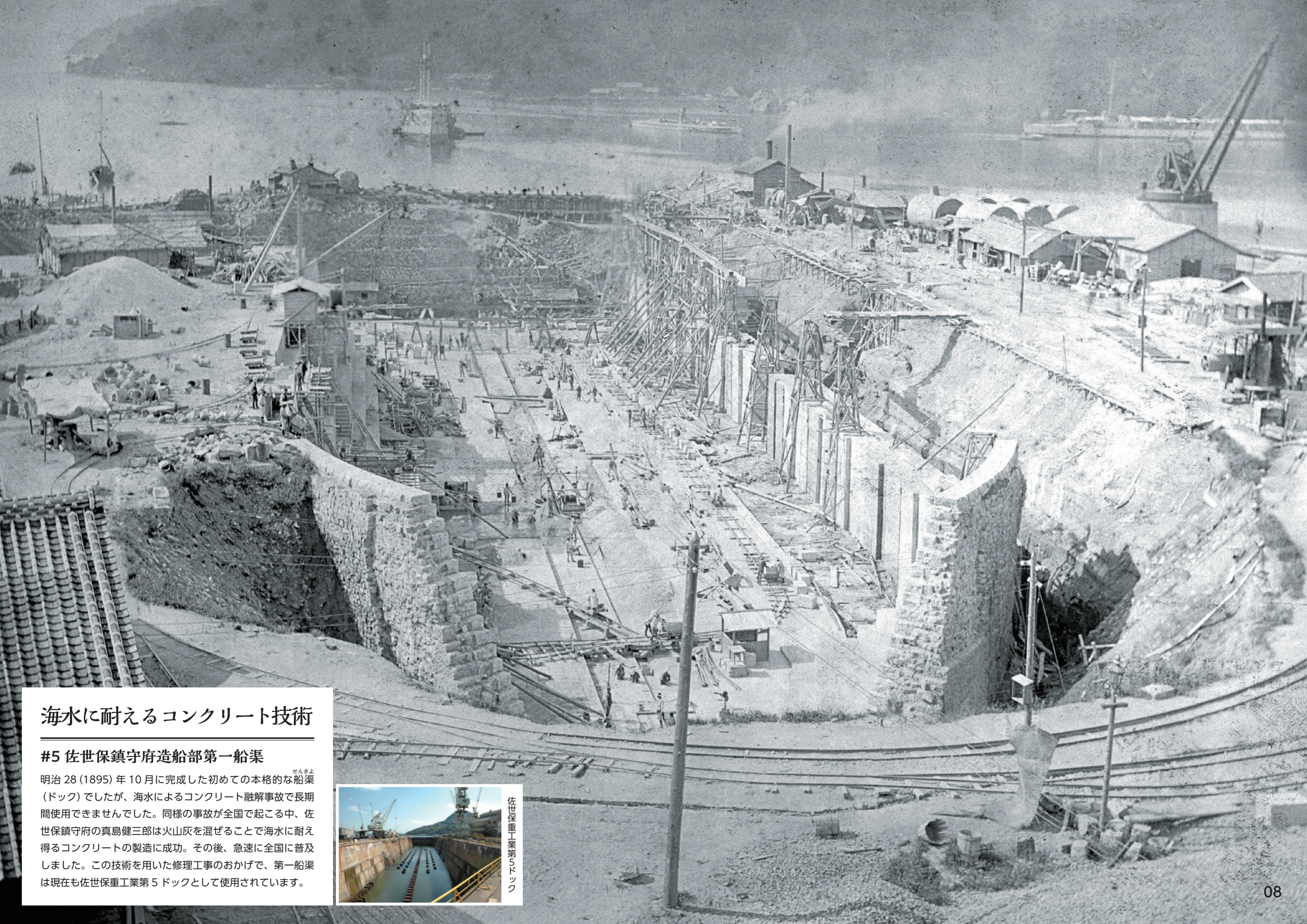
完成直前の佐世保無線電信所（針尾送信所）の写真。一号塔（左）と二号塔（中央）は既に完成し、頂部には三角形の空中線展張装置（通称かんざし、一辺約18m、重さ約9t）が装備されています。当時、遠距離無線通信の主流であった「長波」を発信するための装置でしたが、老朽化のため昭和50年代に撤去されました。佐世保鎮守府の技術陣が研究と実験を繰り返して発展させてきた鉄筋コンクリート技術の集大成とも言える超高層構造物です。

完成：大正11（1922）年



「かんざし」を
挿した無線塔





海水に耐えるコンクリート技術

#5 佐世保鎮守府造船部第一船渠

明治 28 (1895) 年 10 月に完成した初めての本格的な^{せんきよ}船渠 (ドック) でしたが、海水によるコンクリート融解事故で長期間使用できませんでした。同様の事故が全国で起こる中、佐世保鎮守府の真島健三郎は火山灰を混ぜることで海水に耐えるコンクリートの製造に成功。その後、急速に全国に普及しました。この技術を用いた修理工事のおかげで、第一船渠は現在も佐世保重工業第 5 ドックとして使用されています。



佐世保重工業第5ドック



PHOTO TOPICS

47年の歴史に幕「佐世保市交通公園」が閉園

12月28日、市民の皆さんに長年親しまれた「佐世保市交通公園」の閉園式が行われ、47年の歴史に幕を下ろしました。

交通公園は当時、深刻な社会問題となっていた自動車事故を防ぎ、交通ルールを学ぶ場として昭和47年に整備されました。閉園以来、ゴーカートを中心とした交通安全教育を実施し、これまでに約280万人が来園されましたが、少子高齢化等の社会構造の変化や交通事故件数の減少、施設の老朽化などの理由によって、このたび閉園となりました。

閉園式で朝長市長は「閉園は大変感慨深いものがありますが、これから『佐世保市交通安全学習館』として新たな交通安全教育を推進していきます」とあいさつ。1月からリニューアルオープンする「交通安全学習館」で新たに導入される体験型シミュレーター機器も披露され、地元の子どもたちと一緒に体験しました。

当日はゴーカートの無料開放も行われ、たくさんの来園者が列をつくり、最後の運転を楽しみました。



新春独楽廻し大会が開催

1月2日、本市の伝統的工芸品「佐世保独楽」を使った新春独楽廻し大会が島地公園で開催され、子どもから大人まで165人が腕前を競い合いました。佐世保独楽は別名「喧嘩独楽」とも呼ばれ、「息長勝問勝競べ」の掛け声とともに独楽を投げ、回る時間の長さを競い合います。来賓あいさつで朝長市長は「この大会は一年の縁起を担ぐめでたい行事。ことし一年が素晴らしい年となるように少しでも長く回し、楽しんでほしいです」と述べ、集まった皆さんと共に新春のお祝いをしました。



佐世保の文化財を知るこの3冊



佐世保市の文化財を探る。

A5版 127ページ
佐世保市教育委員会 著
平成25年3月発行 無料

市内を10のエリアに区分し、エリアごとに文化財を紹介した冊子です。文化財の所在地や見学用駐車場の有無、最寄りの公共交通機関、連絡先、見学の際の注意事項などを詳細にお知らせしています。

また、エリアごとに特集ページを設け、コラムやこぼれ話などを数多く紹介しているほか、巻末には市内の近代化遺産マップや遺跡群マップも掲載。佐世保の文化財を余すことなく紹介したボリュームたっぷりの一冊です。

(配布場所)
市役所文化財課や佐世保観光情報センター(JR佐世保駅構内)のほか、市立図書館などでも配布しています。在庫がない場合もありますので、あらかじめご了承ください。

※在庫数に限りがあるため、配布は1人1冊としています。



佐世保市近代化遺産写真集 Vol.1 近代佐世保130年の軌跡

A5版 66ページ
佐世保市教育委員会 著
平成27年7月発行 1,300円

「近代化遺産」とは、明治維新前後から昭和30年代ごろまでに造られた建造物のうち、我が国の在来工法ではなく、西洋から導入された工法で建設され、日本の近代化の歩みを象徴するもの、あるいは近代化に貢献した建造物などを総称した呼び名です。本市には700件以上の近代化遺産が存在しており、それらの多くは佐世保鎮守府に関連するもので、今も現役として使われていることが大きな特徴です。

この写真集では、「軍港」「造船」「水道」「交通」「通信」「炭鉱」「民間施設」のテーマごとに、本市の歴史や文化を象徴する、よりすぐりの近代化遺産28件を紹介しています。

(販売場所)
市役所文化財課



佐世保市近代化遺産写真集 Vol.2 佐世保の近代建築

A5版 79ページ
佐世保市教育委員会 著
平成29年3月発行 1,200円

明治19年に佐世保に海軍鎮守府を設置することが決まり、翌年にはさまざまな工事が始められました。市内には次々と建物が建てられていきましたが、その多くは煉瓦を用いた大規模なものでした。当時、多くの市民は木造で土壁、平屋建ての日本家屋しか知らなかったため、その堂々たる建物群を見て、大変驚いたといわれています。

以降も新たな工法や材料が開発されるにつれ、常に進化を遂げてきた近代建築物。この写真集では、市内に建てられた近代建築物について、特にその材料に着目し、木や煉瓦、石、鉄骨、鉄筋コンクリートなどの区分ごとに、その代表例28件を紹介しています。

(販売場所)
市役所文化財課